

言葉は澄んでいるか

言の葉OFFICEかのん代表 川邊 暁美

◆マスク越しでも明瞭に

今やマスク着用は社会生活の必須条件となり、「マスク越しでも明瞭に言葉が伝わる話し方を教えてほしい」という相談も頻繁にされる。

マスクで顔の半分以上が隠れてしまうと表情が読めず、誤解を生むことになりかねない。そのため、言葉足らずにならない、小まめな説明を心掛ける。加えて、うなずきやジェスチャーなどで意味を補うこと。また、声がマスク内にこもるため、滑舌を意識し、相手の反応を確認しながら、ゆっくりめに話すことなどをアドバイスしている。

マスクが習慣になったことで、話すときには声と言葉を確かめながら発しないと相手にきちんと伝わらないということを意識する人が増えた。一方で、マスク越しであっても、しっかり説明責任を果たすべき場で、答弁者の言葉の切れ味が鈍かったり、論点をずらしたりするような例も多く見受けられる。

◆女性政治家・官僚こそ悪しき慣習打破を

総務省の接待問題で名前が浮上した元大臣や幹部たちの「会食はしたが、会費制で折半したから接待ではない」「仕事の話はしておらず、懇談だった」などの発言は、言葉に重みがなく、どこか言葉遊びのようにさえ響く。しかも、女性初の〇〇という旗を掲げて邁進してきたであろう政治家や官僚の口から、そういった発言が出ると失望を禁じ得ない。

くしくも、東京五輪・パラリンピック組織委員会の森喜朗前会長の女性差別的発言に対して、SNSでも「#わかまえない女」の声が上がるなど、今こそ旧態依然とした慣習や性別による偏見、役割分担意識を改めるために、社会を挙げて行動しようという機運が高まっているときである。

「日本は外圧を受けないと変わらない」とは黒船来航の話ではなく、常に思うようにジェンダー平等が進まない日本の現状を嘆いて言われてきた言葉である。今回、世界中から非難を招いたのを機に、一気に改革が加速するかと期待していたのだが、現在、意思決定の場にいる貴重な女性が、従来の悪しき慣習に同調してしまっていたとは…。

◆「言葉の一番ダシ」

3月8日の国際女性デーに合わせて発表されたイギリスの経済誌「エコノミスト」による「女性の働きやすさ」ランキングでは、日本は経済協力開発機構(OECD)加盟29カ国中、28位。企業における女性管理職や衆議院の女性議員割合が低いことが要因だ。

さまざまな意思決定の場への女性の参画を増やすことは喫緊の課題と言えるが、ただ数を増やすだけでは社会は変わらない。女性が参画し、これまで当たり前とされてきた社会の構造、慣習や働き方、価値観などが見直す議論が交わされることで、女性だけでなく多様な人が力を発揮できる、持続可能な社会の実現に近づくはずだ。そのためには、「言葉に責任を持つ」「わかりやすい言葉で伝える」ことが基本ではないだろうか。

長田弘(おさだ・ひろし)氏の詩「言葉のダシのとりにかた」では、言葉をおつおぶし、意味を昆布に例えて、言葉を透き通るまで正しく削り、厚みのある意味と合わせ、アクを丁寧に掬(すく)い取って、残った「言葉の澄んだ奥行き」、それが「言葉の一番ダシだ。言葉の本当の味だ」と表現されている。

少しの濁りもない、澄んだ言葉、深い意味が込められた言葉を責任ある立場の人には選んでいただきたい。また、自分自身も心掛けて発信していきたいと思う。

(かわべ・あけみ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表)

この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで

本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003